

第 72 回公開シンポジウム

保育の質と子どもの発達－Ⅱ

～アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の乳幼児調査から～

◆ プレゼンター サラ・フリードマン
元アメリカ国立小児保健・人間発達研究所 副所長 / 発達心理学

◆ パネリスト 菅原 ますみ
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授 / 発達心理学

◆ 司 会 一 色 伸 夫
甲南女子大学総合子ども学科教授 / 子どもメディア学

◆ 通 訳 月 足 亜由美
甲南女子大学英語英米文学科講師

一色：それでは、第 72 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「保育の質と子どもの発達」というテーマでアメリカ国立小児保健・人間発達研究所の乳幼児調査のお話をさせていただきます。既に皆さんはポスターで見ておられる方も多いかと思いますが、家庭外の保育が一般的となっている今日、保育の良さを最大限に活かして、リスクを最小限に抑えることが重要になっています。そこで、今日は保育の歴史、保育における乳幼児の愛着、能力などの最新の研究成果を通して、子どもたちの年齢にあった情緒的、社会的そして認知的発達を支えるための保育の質、この保育の質とは何かを皆さん方と一緒に考えていきたいと思います。本日の基調講演をアメリカ国立小児保健・人間発達研究所、通称 NICHD の乳幼児調査の責任者であり、元 NICHD 副所長のサラ・フリードマン先生にお話させていただきます。パネリストとして、お茶の水女子大学の菅原ますみ先生においでいただいております。そして、通訳は本学の英語英米文学科の月足先生にお願いしています。今日は、非常に中身の濃い講演であります。早速、サラ・フリードマン先生から「保育の質と子どもの発達」のテーマについてお話させていただきます。よろしく願いいたします。

フリードマン：一色先生、ご紹介いただきありがとうございます。アメリカから遙々参りまして、今日はここで保育と子どもの発達についての情報を皆さんにお話できることをとても光栄に嬉しく思っています。保育者と研究者とその保育の研究が実際に及ぼす影響は、輪、サークルをなしています。皆さん保育者になられる方が多いと思いますので、皆さんにとって役立つ情報をお話できればと思っています。

私は、1980年代の終わり頃から保育の研究を行っています。その頃既に、保育についての膨大な情報はありました。そこで、保育について、歴史的な観点からお話したいと思います。研究者たちが今もなお、保育について研究を行っており、これからもずっと研究が続くと考えられますが、それは、なぜなのかを皆さんに説明したいと思います。今日の講演内容としましては、保育とは何か、保育に焦点を当てる理論的根拠の歴史的变化、研究課題など行われてきた研究の歴史的变化についての情報となります。また、保育と子どもの発達についての研究結果、最後に今後の研究の方向性についてお話しします。

保育とは何かということですが、保育が存在するようになった理由を確認しておきたいと思います。保育は子どもを育てる責任を担う家庭を支援するために存在しています。保育とは、母親が育児以外のことに従事する間、子どもたちに対して行う定期的なケアのこと言います。親のために用意されている保育と、親が子どものために選ぶ保育は、保育において何が重要かという社会的、個人的価値観を反映しています。また、それは、リソースを社会と親たちが持っているかどうかとも反映します。

保育の環境は、すべて同じであるわけではありません。それは、保育がどこで行われているか、子どもの自宅か保育者の自宅か、施設か、誰が保育を行っているか、親類か、親類以外の人かで異なりますし、保育を受けている子どもの数、保育者に対する子どもの割合に応じて異なります。また、保育の環境は、保育がどのように行われているか、注意深く行われているのか、すぐに反応が得られるのか、知的な刺激があるか、子どもが保育をどう経験するかに応じて異なります。なぜ保育に注目するのかについては、過去の見方では、研究者が保育に注目してきた理由は、時代と共に変化してきています。元々、母親が働き、子どもを親戚以外の人に委ねることに対して、懸念がありました。家庭が子どもの面倒を見る責任を放棄しているという懸念があったのです。また、母親が小さい子どもから離れていると、子どものシグナルを読みとる能力を得る機会が持てずに、子どもの欲求に対して、敏感に素早く反応することができなくなるのではないかと心配がありました。もう一つ、保育を受けている子どもは、母親をすぐ反応してくれる安心できるよりどころ、安心感の源として、信頼できるようになる機会を持っていないのではないかとすることも懸念されました。なぜ保育に注目するのかということで、現在では、保育に関する研究は、保育が子どもの発達ニーズをサポートするような環境にどうやっていくかに重点が置かれています。この目的は、子どもたちの身体的、情緒的、社会的、認知的発達にとって、環境の質が重要な役割を果たしているという科学的根拠に支えられています。質の高い保育環境を作るという目的は、子どもの望ましい発達へとつながるような保育の条件を特定し、そして、ポジティブな結果が最も期待できるようなこれらの条件のレベルを特定することで達成されます。

保育に関する研究課題ですが、保育についての初期の研究課題は、一元的、包括的なものでした。研究者たちが問うたことは、親以外の保育を受けた子どもは、保育を受けたことのない子どもと比較して不利であるのか、保育が子どもにもたらす効果は、家族背景によって異なるのか。保育の効果は、子どもの機能の異なる領域、例えば、認知や友達関係で同じなのかといったことです。現在の研究課題は、更に複雑なものになっておりまして、保育の様々な側面、保育のタイプ、保育の期間、保育の質の効果に関するものです。また、子どもの社会的認知的機能といった、特定な結果にも関連しています。研究者たちが、今関心があるのは、保育の長期的な結果で、時を経た結果が直線的なものなのか、

それとも曲線的なものなのかです。例えば、ケアの質、保育の質が高くなれば、それは子どもの発達全体において、認知的効果を高めるのか。それとも発達の初期の段階においてのみなのかということです。また、様々な結果の軌跡と関連のある、質の閾(しきい)値についても最近に関心が集まっています。つまり、研究者が知りたいのは、そこよりも下であれば、保育の長期的な効果が小さく、そこよりも上であれば、長期的効果が極端に高いというような保育の質のレベルがあるのかどうかです。保育研究の波には、4つの波があると言われます。私のスライドでは、それぞれの波の特徴について書いてあります。スライドでわかることは、保育研究の考え方の変遷と複雑化です。今日は、第一の波と最後の第四の波の特徴についてのみお話をします。

<p>保育研究(第一の波)</p> <ul style="list-style-type: none"> 多くの研究は、集めやすいサンプルを少数集めて行われたものだった 保育は画一的な考えられ方がされていた 大学と連携した質の高い保育所が研究対象であった 子どもの個人差はほとんど研究の対象とならなかった 家庭環境の影響は考慮されなかった  <p>CNA</p>	<p>保育研究(第二の波)</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究と分析デザインに主要な人口統計学的変数を含むものとなった。 保育環境の質の変化と子どもの発達における変化との関連性を科学的に究明した。 保育の質を測るため、最適な空間使用、教材、日々の保育スケジュールを向上させる実践、指導、子どもの発達を、複数の手法で頻繁に評価した。 保育の質と発達結果を同時に収集した研究から多くの発見がもたらされた。  <p>CNA</p>
<p>保育研究(第三の波)</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭環境と保育形態の関連性に焦点をあてた。 家庭環境と保育形態が子どもの発達にどのように関連しているのかを探求した。   <p>CNA</p>	<p>保育研究(第四の波)</p> <ul style="list-style-type: none"> 保育の影響を理解するためには、保育の特徴と子どもの発達を促すさまざまな要因との相互関係を理解しなければならないことが明らかになってきた。 サンプル数は多く、人口統計的に多様で、代表的なものによるよう選ばれている。 現行の分析手法は高度で、 <ul style="list-style-type: none"> —人口統計的な家族の特徴の統制を含む —家庭環境や育児慣行の質によって統制または媒介 —保育の特定の側面より予測 —子どもの発達の道筋を予測 —統計上の有意性に加え、効果の規模にも注目 —ある境界を超える効果が見られる質の閾(しきい)値を探る <p>CNA</p>

まず、第一の波ですが、この段階では、便宜的に集めて小さいサンプルに絞った研究が行われました。保育は、画一的な考え方で研究されました。つまり、保育を受ける場合と、受けない場合です。子どもが保育を受け始めた年齢、保育のタイプ、保育時間、期間における多様性を考慮に入れずに研究が行われました。また、研究された保育の環境は、質の高い、大学と連携した保育所のケアでした。子どもたち一人ひとりの違い、子どもの性別、年齢、人種的背景といったものは、殆ど研究されませんでした。子どもの発達における家庭の影響は、分析の際、統計学的に統制されなかったので、研究結果の一部は、家庭の影響によるものだった可能性があります。

保育研究の第四の波ですが、そこでは、サンプルは大きく、人口統計的に多種多様で、なるべくその国の代表的な国民のサンプルが使われました。人口統計的な家庭の特徴は、統計学的に統制され、結果が家庭の人口統計的特徴の違いによるものとはならないようになっています。分析では、家庭の環境と親の養育の質が統計学的に統制されています。また、親の養育によって、保育の効果がどの程度媒介されるのかが検証されています。この媒介という概念は、保育が親の子育てに、子育てが子ども

の結果に影響することで、保育の効果が表れる可能性のことをいいます。最近の第四の波の研究では、保育と子どもの発達結果の予知は、保育の特定の側面、保育のタイプ、時間、質から行われています。予知は長期的な発達結果の軌跡について行われています。研究者たちは、効果の規模に注目します。つまり、研究者たちが知りたいのは、研究を行っている保育の特徴において、一標準偏差分変化をさせた時の結果に、どのくらいの変化が現れるのかということです。ごく最近では、研究者たちは、そこよりも上ならば、子どもの結果の予測がよくなるというケアの質の閾(しきい)値に注目し始めています。

12～17のスライドは、子どもと母親への愛着に保育が及ぼす影響に関するものです。この話題は、長い間研究者、そして、一般の人々の関心を集めました。最もよく知られている愛着の理論では、定期的、日常的に母親から離れることで、親密で温かい子どもと母親の関係を築く機会が少なくなってしまうのではないかと言われています。そのため、研究者たちは、二つの可能性に目を向けました。子どもが保育を受けている場合、母親は子どもの欲求に対して反応がより敏感でないという可能性、それから、保育を受けている幼児は、母親に対する愛着がより低いという可能性です。

13のスライドは、保育と母親の敏感さ、感受性の関係についてです。これについての研究結果は、複雑なものでした。殆どの研究では、保育を受けている子どもと子どもの欲求に対する母親の反応の鈍さとの関連性が見つかることはありませんでした。しかし、最近のある研究では、子どもが保育を受けている時間数と、母親の敏感さとの間に、若干のポジティブな相関が見られました。つまり、子どもが保育で過ごす時間が長ければ長いほど、母親の敏感さが低下するというものです。その他の研究でも、子どもが保育を受けることが、母親の反応の敏感さにもたらす影響をサポートするものがありました。

保育→母親のセンシティビティ(子どもの心を読み取る力)

- 母子間の相互作用の研究では、母親のセンシティビティ(子どもの心を読み取る力)と反応が評価された。保育時間と幼い子どもに対する母親の行動の間には通常、統計学上有意な関連性は見られなかった。(Burchinal, Bryant, Lee, & Ramey, 1992; Egeland & Heister, 1995; 他)
- 一方、NICHD ECCRN: Early Child Care and Youth Development (1999-c)によると、保育時間が長くなるほど、母親の子どもへの反応は低下し、子どもの母親との関わりも少なくなる結果がでている。
- 類似した結果もBelsky(1999)他による生後6カ月を対象とした研究により発表されている。(Campbell, Cohn, & Meyers, 1995; Stifter, Coulehan, & Fish, 1993)

CNA13

14のスライドは、保育が愛着へ及ぼす影響です。従来の研究結果では、いくつかの研究は、保育を受けることは、子どもの母親に対する愛着の不安定さと相関するという予測をサポートするものでした。しかし、最近の研究では、愛着についての従来の研究結果と同じ結果を得ることはできませんでした。これは、母親と日常的に接触する時間が非常に短くても、安定した愛着関係は、十分であるためだと思われる。また、別の説明としまして、子どもが保育で過ごしている母親が、保育で全く過ごしていない子どもの母親と比べて、子どもと触れ合う時間は、週に12時間少ないだけであったということに

も起因しています。最近の NICHD の研究で得られた結果は、もっと微妙なものでした。保育自体、それだけで、子どもの母親に対する愛着の不安定さの原因となりうるわけではないということです。しかし、ある条件の基では、保育を受けることが不安定な愛着を引き起こすリスク要因になります。例えば、子どもが保育を受け、母親が子どもに対してあまり敏感に反応しない場合、保育を受けていることが子どもの愛着にとってリスク要因になります。今述べた研究結果については、NICHD 研究の子どもたちが3歳の時にも一部同じ結果が得られました。保育の量が大きくなると、それが他のリスク要因と組み合わさった時に、リスク要因となることがあります。

保育→愛着に関するこれまでの研究結果



- 小規模な調査クラスターに基づく2次データ分析では、乳幼児が母親と日常的に離れていることは愛着の安定性においてマイナスの影響を及ぼすとする考えを支持するものであった。(Belsky & Rovine, 1988; Clarke-Stewart, 1989; Lamb, Sternberg & Prodromidis, 1992)
- 例えば、Belsky and Rovine (1988) によると、早い時期から長時間の保育を受ける幼児の43%が、母親との愛着関係が不安定なものであった。これに対し、保育がもう少し限られていた幼児で、愛着関係が不安定だったのは、26%であった。
- しかしながら、最新の研究結果では・・・

CNA 14

保育→愛着に関する最近の研究結果

- 最近の3つの研究結果(NICHD ECCRN, 1997b; NICHD ECCRN 2001b; Roggmn, Langlois, Hubbs-Tait, & Reiser-Danner, 1994) は、これまでの愛着に関する研究結果を再現することができなかった。
- また、イスラエルの48キブツで暮らす子どもたちを対象としたSagi, Van IJzendoorn, Aviezer, Donnell & Mayseless (1994)の研究では、(すべての子どもではないが)多くの子どもたちにとって、両親と日常接触する時間が最小限であっても、愛着の安定性を得ることが可能であることを示唆している。
- 保育が愛着におよぼす影響が見つからない理由の一つは、週30時間以上保育されている子どもの母親が、全面的に子どもの育児をする母親と比較されて、子どもとかわった時間が週12時間少ないだけであったことに起因しているのかもしれない。
- また、保育にゆだねられた子どもと、母親が育児に専念している子どもとの間には、母と子の相互作用の質において差がみられなかった。

CNA 15

18のスライドは、保育と社会性の発達に関するものです。保育が子どもの社会的適応力に対して持つ効果について懸念があり、その原因は、次のようなことでした。子どもの社会化には、各家庭が重要な役割を担うので、子どもが保育を受けると、家庭の役割が低下する、または、少なくとも変化すると考えられました。これは、より好ましくない社会性の発達につながると考えられたのです。初期の研究は、これまで今述べた懸念を支持するものでしたが、最近の研究結果は複雑で、保育の質、子どもが保育を受ける時間数、保育のタイプ、結果のデータがとられた時の子どもの年齢によって多様です。

また、注目すべきことは、効果の方向がどちらかに関係なく、結果の効果規模は、小さいということです。

保育と社会的な成果

- 懸念される理由：
家族は子どもの社会性の発達(社会性を獲得する過程)において重要な役割を担う。子どもが保育に託された場合、家族の役割が縮小、あるいは少なくとも変容する可能性があり、その結果、子どもの社会性の発達に望ましくない影響をおよぼすのではないかと。



CNA18

次に、NICHD の発達初期の保育と子どもの発達に関する研究の例を見ておきましょう。質の高い保育を受けると、2歳でよりよい社会的スキルを獲得し、また、4歳半で教師との衝突が少ないという結果につながっています。また、質の高い保育は、15歳で、外面化行動が少ないという結果と相関しています。先程は、保育の質との関係を言いましたが、今度は、保育の時間数との関係です。保育で過ごす一週間辺りの時間が長ければ長いほど、3歳と4歳半で問題行動を示すと評価される可能性が高くなります。また、4歳半で保育者との衝突が多く見られます。4歳半で友達とのマイナスの行動も多く示すという観察もあります。保育の時間数は、3年生での問題行動の予測をしませんが、社会的能力が低くなる事を予測しています。また、保育の時間数は、6年生での外面化行動や教師との衝突を予測していません。

今度は、保育のタイプについて見てみましょう。施設型、つまり、保育所や幼稚園などで保育を受けることと、2歳と3歳において、社会的スキルの評価が低くなることとの間に相関が見られます。また、施設型の保育を受けると4歳半で、友達との遊びの中で、ポジティブな相互作用が多く見られることもわかりました。もう一つ、外面化の問題行動が教師によって多く報告されました。他の最近の研究結果も複雑なものです。可能性としてあげられるのは、子どもが保育で過ごす時間が社会的発達にネガティブな効果を持つのは、保育環境がポジティブな社会的発達を育むようなものではないことが原因かもしれません。

こちらは、保育と認知的言語的発達に関するものです。研究者たちが心配したのは、非常に早い時期に保育を受けることは、子どもの認知的、言語的発達にマイナスの影響を与えるのではないかということでした。そこで彼らは、子どもの言語と認知の発達における保育の影響を研究しました。今日、ここでお話しするのは、子どもが保育で過ごす時間と認知的、言語的発達との関係、そして、保育の質と子どもの発達との関係についてです。保育の時間と認知的、言語的発達との関係についての結果は、複雑で、いつも同じ方向の結果がでるというわけではありません。まず、一番目に保育の量と中間時期、これは学校の中期ですが、その段階で成績との間に、正の相関が見られました。二番目に、早期に見

られる好影響は、時が経つと消えることが報告されています。三番目ですが、乳幼児期に保育を受けた子ども、特に生後1年の内に預けられた場合、保育時間が子どもの学力にもたらす影響について、ネガティブなマイナスの結果が得られました。四番目ですが、保育時間と認知的、言語的結果との間に相関は見られませんでした。先程見た説明は、ポジティブなものやネガティブなものを両方含んでいて、複雑ですが、これに対する説明もどうすればいいのかを考えるわけです。

これらの複雑な結果は、保育と家庭におけるケアの質によって、ケアの時間の影響が異なることと関係があるかもしれません。両方の環境、つまり、保育と家庭における環境において、ケアの質が高ければ、保育時間の影響は見られません。家庭でのケアの質が、保育での質よりも高ければ、子どもの発達は、保育を受けていることで悪い影響を受けます。しかし、保育のケアの質の方が家庭での質よりも優れていれば、保育の影響は有益なものになります。これらは仮説でして、それをサポートするような証拠がまだありません。ですが、これらの予測、仮説はたいへん興味深く、さらに探求する価値がありそうです。保育の質と認知的、言語的結果の関係ですが、保育の質は、よい認知的、言語的発達と関連することが見られます。このことは、多くの研究で示されています。この予測は、すぐに現れる結果だけではなく、長期的な結果についても言えるものです。最近の研究では、子どもが社会経済的に恵まれていない場合に、保育の質からより多くの恩恵を受けるとことが示されました。このケアの質の効果に関する研究結果は、確信が持てるものですが、問題はその効果規模がとても小さいということです。質を評価するのに、異なる手法を使った様々な研究に渡って、これは言えることです。保育全体ではなくて、具体的な側面を理論的に関係のある結果との関連、例えば、認知的刺激と認知的結果との関係をみると、効果は少し大きくなります。

ここで将来の方向性についてお話すると、将来は、手法を開発しなければならないと考えられます。研究者たちにとって最も重要な仕事は、多分、保育の質を評価するのに、心理測定学的な、健全な手法を考えることです。所得の低い家庭に介入研究を行っているのですが、所得が低い家庭における子どもが高い質の保育を受けると、影響が非常に大きいということがわかっています。ですが、効果規模はとても小さいものです。ですから、よりよい手法を開発しなければならないということが考えられています。保育の質を評価するのに使われている手法があまりよくないのではないかと提議する論文が最近出ています。アメリカの政府は、保育提供者とそのケアを受ける子どもたちのやりとりの質を評価する手法の開発をするように求めています。この評価手法は、保育施設と家庭での保育、両方における保育者と子どものやりとりを評価するようなものです。質の評価方法は、年齢的に、また異なる文化的背景を持つ個人にとって適切で、特にアメリカでは、いろいろな文化的背景を持つ人たちがいますので、これは特に重要です。また、特別な発達ニーズを持つ子どもに見合ったものである必要があります。

もう一つ非常に重要な仕事は、保育の質の閾(しきい)値を求めることです。保育の質を向上させるためには、目指す最低パフォーマンスの水準を決定する必要があります。そして、望ましい結果の少なくとも最低水準を予測できる保育の質の水準を決定しなくてはなりません。また、子どもの成長に伴って、結果が急激に上昇することが期待できる保育の質の水準を決定する必要があります。望ましい結

果の水準とスキルの習得において、長期的な望ましい変化につながるようなケアの質の閾（しきい）値を明確にするための研究も必要です。つまり、そこよりも上であれば、結果が非常に高くなり、そこよりも下であれば小さくなるというような閾（しきい）値を求めることが必要です。この仕事は、もちろん簡単なものではなくて、これらの質の問題は、個々の関心事項の結果に対して具体的に当てはまるものではありません。例えば、友達関係を予測する質は、注意力や読む能力を予測するものと同じではないと思われます。私たちの目指したいもの、ゴールの状態と今の状態を明確に示しておけば、保育を受ける子どもたちの結果が、本当に向上する可能性がより高くなります。ケアの質の評価手法と閾（しきい）値の研究結果を待っておりますが、それと同時に並行して、無作為抽出研究ができると考えられます。つまり、この研究は、子どもの一つのグループをある先生に、もう一つのグループは他の先生のところに割り当てて研究するということです。この分野の広い専門知識に基づいて、私たちは、保育者が訓練をうけた優れた教師になれるように訓練し、そのような保育者に保育を受けた子どもと受けなかった子どもとの発達を比べる必要があります。そのような研究をすることによって、今の保育の質がいいものかどうかを評価することができると考えます。

結びとしまして、この時間は、保育研究の歴史的変換とその変換のポイントと現在までの研究結果、それから研究の将来の方向性をお話しました。見てきましたように、研究の歴史は、研究者が保育と保育の子どもに及ぼす影響について研究を始めた時から、長い道のりを経てきました。これからの道のりもまだ長く、興味の尽きない非常に面白いものです。どうもありがとうございました。

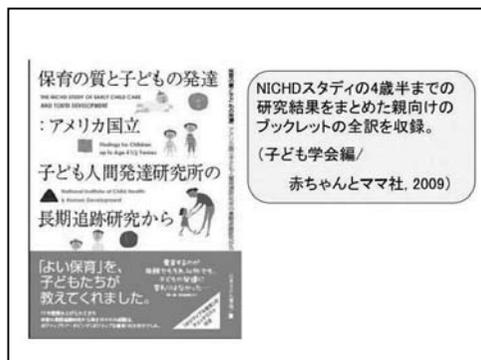
一色：フリードマン先生、素晴らしいご講演をありがとうございました。本当に丹念に詳細な研究結果、エビデンスベースド、研究結果を踏まえて、将来の方向性まで言及していただきました。その中で、保育の質、そして保育の時間数などが、いろいろな面で関係していることと、保育所と家庭、その両方のケアが必要であるということも見えてきました。それでは、ここから、菅原先生にお話をお願いいたします。菅原先生には、アメリカでの NICHD のスタディから学ぶことと良質な保育を維持、発展させるためにはという観点からお話していただけます。

菅原：皆さん、こんにちは。お茶の水女子大学の菅原と申します。今日は、保育と子どもの発達との関係に関する非常に重要なフリードマン先生のお話を皆さんと一緒に伺うことができ、大変嬉しく思っております。フリードマン先生、貴重なご講演をありがとうございました。今日のお話の中で、保育が子どもの発達にどう影響するかについて、アメリカを中心として非常に多くの研究が真剣に重ねられてきたという状況を理解していただけたかと思います。

これから少しの時間、今日、フリードマン先生にお話していただいたアメリカの NICHD の研究から、日本の保育や幼児教育に関わる私たちが何を学ぶべきかについて、皆さんと一緒に考えたいと思います。

まず、今日のお話の参考となる本を紹介したいと思います。この本では、フリードマン先生ご自身が実施されたアメリカの国立子ども人間発達研究所の成果をまとめたブックレットの全訳を掲載していま

す。この研究は長期にわたる追跡研究で、子どもたちは現在18歳位になっているのですが、その最初の部分の4歳半までの研究成果がまとめられています。このブックレットは、アメリカの親たちを含めた一般の人々にこの研究成果を分かりやすく伝えるために編集されたものです。ここでご紹介させていただいている本は、このNICHDのブックレットの全訳と日本の保育の状況について解説を加えたもので、日本子ども学会が編集して、赤ちゃん和妈妈社から2009年に出版いたしました。是非、皆さんもこの本を手にとりていただいて、貴重なアメリカの研究成果についての理解を深めていただきたいと思います。



さて、今日のフリードマン先生のお話では、保育と子どもの発達との関係性について、どうしてそのような研究がアメリカで必要とされたのか、また、どんな研究の歴史があるのか、研究の結果として何が明らかになって、まだわからないことは何なのか、今後どんな研究が必要かについて詳しいお話がありました。そこから私たちが学ぶべきことはたくさんあるわけですが、いくつかピックアップしてみたいと思います。

NICHDスタディから学ぶべきこと

- “乳児期からの母親以外の他者による保育の利用の是非”について信頼できるエビデンス・ベースドな指針を提供していること
 - ⇒ ① 母親の養育と母親以外の養育で、この研究で扱われた発達の諸側面には違いはなかった
 - ② 両者ともケアの“良質さ”が重要で、それを保証する“条件”(保育については、保育者と子どもの人数割合や保育者の専門性など)に目を向けるべきであること
 - ③ 発達の側面(親への愛着形成、認知/言語発達、社会性の発達)ごとに保育(保育のタイプや時間、質)の効果は異なるので、1つずつ検討する必要がある
- “子どものより健やかな発達”を目的変数に置いた実証的な追跡研究の重要性を示していること
 - ⇒ 保育は子育て家族を支えるために存在するもの。それぞれの時代・文化のなかで、どのような保育のあり方が家族と子どもにとって望ましいのか、科学的な研究結果を考慮しながら丁寧にデザインされていく必要がある。

まず、第一点目ですが、日本でももちろんそうですが、世界中で女性が働くようになって、非常に小さい時期から子どもを他者に預ける、母親も育児をするのですが、母親が面倒をみられない時間、他者あるいは家庭外の保育所に子どもを預ける、そのようなことが子どもの発達にどんな影響を与えるの

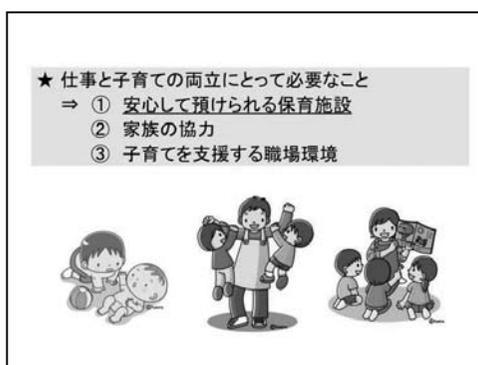
か。多くの人々が、悪い影響を与えるのではないかと心配してきたわけです。母親以外の他者による保育の利用の是非、とまとめてありますが、このことについて信頼できる研究結果が必要で、それについて幾つかのご示唆が先生のお話のなかにございました。今日お話の中にはあまり出てきませんでしたが、特に NICHD の研究の中では、その研究の目的として、母親だけが育児をする場合と、母親も育児するけれどもそれ以外の他者が関わって子どもを育てる場合で子どもの発達に何か大きな違いがあるか、アメリカでは、その2つの比較では違いがなかったという結論を得ています。家庭の影響も大きく、そして保育所の保育の質の影響もあって、両者ともケアの良質さが重要であるということがわかったのです。預けることがいいのか悪いのかということではなく、預けざるを得ない状況が社会に生まれた時に、それが子どもにとってより良い結果を招くためには、家庭も保育所での保育も両方とも、質の良いものを目指すということが必要だということを結果から示唆していただいたわけです。ブックレットの方には、保育の良質さと保育者と子どもの人数割合や、保育者の専門性などとの関連についての詳しい結果が記載されていますので、是非見てください。それから、今日のお話で最も重要で多くの情報をいただいたのが、保育の効果について、発達の様々な側面、例えば親との愛着関係なのか、それとも子どもの言葉など知的な発達なのか、あるいは、攻撃的になったり、友達と仲良くできるかどうかという社会性の発達の側面なのか、それぞれの側面ごとに様々な結果が得られているということについてでした。また、保育の方も、センター型なのか保育ママの家なのか、ベビーシッターさんみたいな方に自宅に来てもらえるのかといった保育のタイプや、どれくらいの時間を預けるのかという保育時間の問題、そして保育の質の問題（ケア・クオリティ）、これらの組み合わせで子どもの発達に対する影響は複雑に異なってくる、ということが重要なポイントだったと思います。

中身をおさらいしておきますと、これはもちろんアメリカの結果ではありますが、一つ重要なポイントは、家庭で養育する母親の子どもに対するセンシティブリティ、子どもの反応に対してどれくらい敏感か、いつもきちんと目配りをして、子どもが何を望んでいるか、子どもが何を考えているか、どんな気持ちかというところに細やかに目がいく、そういう母親が家庭にいるかどうかで、家庭外の保育と出会った時に結果が違つかもしれない、ということです。一番子どもにとってベストなのは、家庭でそのように子どもの反応性にセンシティブな母親がいて、保育所の保育の質が高い。でも、両方ともが悪かった時には、もしかすると、とてもネガティブな結果がでるかもしれない、という解釈について先生からご指摘がありました。家庭外の保育の質と家庭内の養育の質が相互作用して子どもの発達に影響するかもしれない、ということですね。それともう一つ重要要因として、家庭の経済的貧困ということもご指摘がありました。家庭が経済的に苦しい場合に、家庭外保育の質は、より大きな効果を持つかもしれない、といったことです。

それから、保育を受ける時間、保育の量ですが、アメリカの研究でも、長すぎる保育時間はいろいろなネガティブな結果と関係するかもしれないというお話がありました。これは、日本の保育の質と家庭の養育をセットで考える時にも、よく考えなければならない重要なポイントだと思います。そして、最後の方に、研究そのものの課題についても触れられましたが、特に家庭外保育の質を測定する方法としてどういう評価尺度を使えばいいか。これも更に洗練していかなければいけないことも語られました。

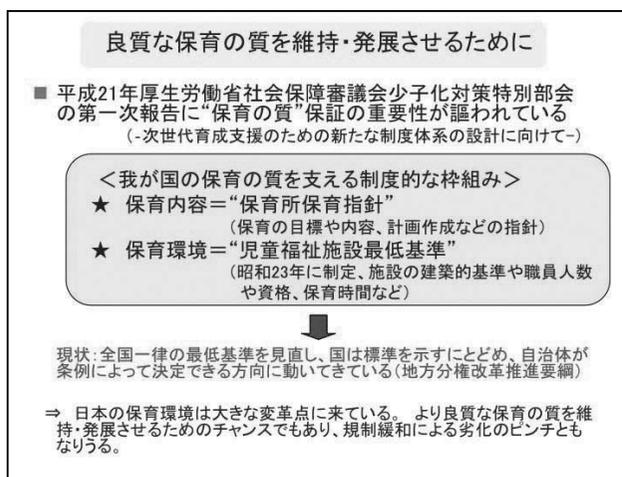
今後日本でも保育の質に関する研究が行われるとしたら、そのときはどんな評価尺度を用いればいいのかは、大きな検討課題だと思います。

子どものより健やかな発達を目的においた、実証的な追跡研究をすることは非常に重要であるといえます。先生のお話の最後にあったように、保育は子育てで家族を支えるために存在するものです。ですから、それぞれの時代、文化の中で、どのような保育のやり方が家族と子どもにとって望ましいのか。科学的な研究結果を考慮しながら、子どもの発達をより良くするものとして社会が保育を作っていくことが大事だというスタンスが大切だと思います。そのスタンスで、今の日本の状況を少し見ておきたいと思います。日本でも、やはり、働くお母さんは少しずつ増えてきていますし、皆さんもご存じのように、社会は少子化しておりますので、今後女性の労働力というのは、大きく期待されています。ですから、保育のニーズはこれから先もさらに大きくなる可能性があり、お父さんやお母さんが仕事と子育てを安心して両立させていくためには、やはり安心して預けられる保育施設、家族の協力、子育てを支援する職場環境、この3つが大事になります。その内の保育施設が本当にこの日本で安心して預けられる場所になっているかどうか、日本でも今後、科学的な検証が必要でしょう。



さて、この日本の保育の質に関して、今、どんな社会的な動きがあるでしょうか。一言でいえば、今は非常に重要な変化の時期に来ていると言えます。次世代育成支援の一環として保育の質が大事であるということを国の方向としても確認していきましょう、ということが、平成 21 年の厚生労働省の社会保障審議会少子化対策特別部会の報告書の中にも謳われるようになりました。ですから、その前まで、国の認識として保育の質を保証しなければいけないことが大きく議論されてきたわけでもなかったのですが、今後はその質について、日本の国としても真剣に考えていきましょうという方向性が出されています。では、日本の保育の質を支える制度的なフレームとなると、日本は国全体で大まかな基準を持っています。一つは保育内容についてで、保育所保育指針があって、皆さんもそれに従って勉強しているわけですが、保育の目標や内容、計画作成の大枠がこの指針によって定められています。日本での保育の質の問題を考えていくときには、この保育指針が実際の保育所での保育にどのように影響していて、それが子どもの発達にどういう結果を生んでいるのかを検討することが必要になると思います。もう一つは、保育所の物理的な環境や、先生の数を何人にするかなどを定めているのが児童福祉施設最低基準です。この大枠の中で保育が展開しているわけですが、それがどんな子どもの発達の結果を生ん

でいるのかを私たちは検討していくが必要になります。今までは全国一律の最低基準となっていたのですが、今、国は標準を示すにとどめて、各自治体が条例によって決定できる方向に制度が変わる方向に動いてきています。これは、とても大きなことです。国全体でひとつの基準が法律で決められていたものが、各自治体の裁量に任されるように変わるわけです。ですから、今日本の保育環境に関する状況はとても大きな変革点に来ていて、これは、簡単に言えばピンチでもありチャンスでもあると考えていくことができると思います。今まで決められていた児童福祉施設最低基準は昭和23年にできたものですが、これよりも良質な保育を作ることできるし、もしかすると規制緩和によってこれを下回るものになってしまう可能性もあります。単純に考えられるのは、財政的に豊かで子どもの教育に熱心な所ではより良い基準ができるかもしれませんし、財政的に苦しい自治体では、それが緩んでしまう可能性があるということです。このような社会の動きについて、皆さんも敏感に見ていてもらいたいと思います。



さらに大きな動きがこの数年のうち起こる可能性があります。民主党の政権が変わらなければ、恐らく、早いペースで、2013年頃までには、幼稚園と保育所の一体化が実現する可能性があります。日本はとても特殊な状況にあって、いくつかの国の保育制度をシートで比較していますが、所管のところを見ていただきますと、アメリカは各州が所管しています。イギリスは幼稚園も保育所も全部、子ども学校家庭省が管轄しています。フランスも保育所は労働社会関係家族連帯省が管轄していますが、日本の場合は、保育所は厚生労働省、幼稚園は文部科学省と所轄が違っていています。これが一体化していく構想が出ているわけです。もう一つこの表でみていただきたいのは、日本では、保育所も幼稚園も他の国に比べて、家庭が負担する経済的な部分が非常に大きいということです。公私ともに日本は有償です。イギリスは、3・4歳児はすべて無償ですし、アメリカも就学前の1年間ほとんどの子どもが公立幼稚園に所属しますが、これは一般的に無償です。

表1 就学前教育・保育制度の国際比較
(文部科学省「教育指標の国際比較(平成20年)より」)

	アメリカ	日本	フランス	イギリス
保育	施設型保育所 (day care center, day nursery, 主に0~4歳) 個人的な家庭保育 (family day care)	保育所 (0~5歳)	集団保育所 (crèche, 0~2歳) 認定保育ママ (assistantes maternelle 0~5歳)	保育所(0~4歳) フレイグループ (保護者によって 運営されている)
就学前教育	幼稚園 (kindergarten, 主に5歳) 保育学校 (nursery school, 主に3~4歳)	幼稚園 (3~5歳)	幼稚園 (3~5歳)	保育学校(2~4歳) 保育学級(2~4歳) レセプションクラス
所管	各州	保育所は厚生労働省 幼稚園は文部科学省	保育所は労働社会 関係家族連帯省	幼児とも 子ども学校 家庭省
無償化の 状況	就学前1年(5歳) は公立幼稚園に 所属するのが一般的 で、無償	公私ともに 有償	幼稚園は 99%が公立 で無償	3~4歳児は すべて無償

★2013年に幼稚園と保育所の
一体化が実現予定

さて、日本の保育環境のレベルの評価ですが、今日はアメリカの保育の質についてフリードマン先生からお話がありましたが、保育の質についての本格的な研究は日本にはまだないのが現状です。しかし、物理的な環境については、昨年平成21年に全国社会福祉協議会が子どもの生活活動の観点から保育所の空間の広さや先生の数などについての研究を行っています。その結果、子どもの保育所での生活をベースに試算された空間の広さは、現行の最低基準では狭すぎる、不足しているのではないかという指摘がなされています。アメリカ、イギリス、フランス、スウェーデン、ニュージーランド、ドイツ、これらの国と比較しても、子ども一人辺りの保育所の面積基準は低い水準にある。職員の配置基準やクラス人数、クラス人数は少ない方が望ましいのですが、人件費が高くなってしまいうけですから、クラス人数を多くして先生を少なくすると経済的には助かるわけですね。そのようなクラス人数も低いレベルにあることがこの報告書で指摘されています。ですから、日本の保育の状況が、物理的環境については、非常に国際的に素晴らしいレベルにあるわけではないということになります。こうした最低基準は、時代や文化の中で、いつも検証されていくべきもので、現在の日本の保育の物理的環境については、現状の改善が求められるということが、この研究では結論づけられています。保育の質についても、今後、同様な実証的な研究が必要であると思います。

保育と子どもの発達との関連については、今日のフリードマン先生のお話の中でも、長い時間をかけて検討されてきたというお話がありましたが、本格的に子どもの発達を目的変数において大規模な研究がされるようになったのは、1990年代以降と言えます。今日ご紹介いただいたような最先端のNICHDの研究では、赤ちゃん時代とか幼児の頃に受けた就学前の保育が、小学校、中学校、さらに高校生になって長期的にどんな影響を及ぼしているか、そのような短期的、中期的、長期的な効果を検証する研究が世界では真剣に展開されるようになってきているのです。

日本の保育環境のレベルは？

★ 平成21年の全国社会福祉協議会の調査研究
(「機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業」より)

子どもの保育所での生活をベースに試算された必要単位空間は現行の最低基準では不足することを指摘。また、6カ国(アメリカ、イギリス、フランス、スウェーデン、ニュージーランド、ドイツ)との比較でも1人あたりの面積基準は低い水準で、職員の配置基準やクラス人数も低レベルにあることがわかった。

⇒ 最低基準は時代・文化のなかで常に検証すべきものであり、保育の物理的環境については現状の改善が求められる、と結論。保育の質についても今後、実証的な研究が必要。

いずれ皆さんにも考えていただきたいこととして、日本の一つの現状としては、急速に少子化の進行の中で、どの親も慎重に幼稚園、保育園を選ぶような時代になって来ている、ということがあります。その時に、親のニーズとしては、日本の長時間労働の現実のなかで、できるだけ長い時間、預けられるところが必要となる。時間に関しては、子どもと葛藤するというか、対立するわけです。子どもにとっては長すぎる保育時間は少し危険かもしれないという結果がアメリカでは報告されていますが、親からすると、できるだけ長時間、安く、便利なところでというニーズがあります。あるいは、早期教育をして欲しい、という親もいて、親にとっての“良い保育”は様々なポイントがあります。このことも、やはり無視することはできないと思います。親にとって望ましい保育というのは、どのようなものなのか。親の意見も無視するわけにはいきません。そして、行政にとってのポイントは、先程から言っていますが、無限に税金が入ってくるわけではないので、有限の財政の中でどのように配分していくかということがポイントになります。これも、私たちは無責任でいることはできないと思います。より良い質の保育、教育を現場で作っていくのは、私たちですから、その財源的な問題にも、目を向けないといけないと思います。それから、教師、保育士、先生たちの立場から望む“理想の子ども像”もあって、これも実際の保育には大きく影響します。そして、今日の話にあったように、実際の子どもの様々な発達の側面にとってどんな保育がいいのか、この点に関しては日本では、まだ、非常に検討が遅れていると思います。アメリカのNICHDのように国全体で研究をして、そのデータを国民の目の前において議論する状況にはまだないと言えます。子どもの発達と健康を指標に含めた本格的な検討が日本でも必要ですが、これには、大きな努力が必要です。保育実践の現場の方々と研究者と行政が力を合わせてこのような研究が展開していければいいと思います。私のコメントは以上です。

一色：菅原先生、どうもありがとうございました。あまり時間がございませんので、これから、保育士、幼稚園、小学校教諭の資格をとってその方面で働く学生の質問を受け付けたいと思います。

学生 A：ご講演ありがとうございました。質の高い保育が必要ということは良くわかったのですが、一人ひとりの子どもにあった質の高い保育かどうかを保育者が見極める方法などはありますか。

フリードマン：まず、保育所、幼稚園の物質的な環境、例えば衛生面などの環境を整えることは一番目にあると思いますが、二番目に、保育者が子どもの認知的、言語的発達を支えるために、子どもの反応に対してすぐにしてあげる、敏感に反応してあげる、注意深く見守ってあげる、それから、教室外のいろいろなことについても教えてあげることも大変重要になってきます。それから、子どもによっては、大人があまり話かけたり、注意を向けられない場合もありますので、保育者がそこをケアしてあげることが重要になってくると考えられます。

一色：では、ここで第一部を終了したいと思います。フリードマン先生、菅原先生、ありがとうございました。

【休憩】

一色：それでは、第二部を始めさせていただきます。第一部では、素晴らしいご講演をお二人の先生からしていただきました。これからは、皆さんが感じたことを質問に答える形でディスカッションを進めていきたいと思います。コメント、質問がある方は、挙手をお願いします。

一般 A：甲南女子大学の英語英米文学科の教員です。今日は素晴らしい講演をありがとうございました。質問ができるような立場ではないのですが、昔、私自身が学生時代に、日本ではあまり多くなかった保育所でアルバイトをしていました。そしてその経験を持って、自分の子どもを保育所で育てました。今先生のお話を伺って、保育の質に関しての科学的なきちんとした報告が日本ではあまり出ていないということと連携しまして、自分がそのような立場で仕事をしながら子どもを育ててきましたので、少しでも早く日本でもアメリカのような質や家庭外保育と実際の母親との質の関係、それがよりきちんと出てくれば嬉しいと思います。そのことは、私にとっては関心が深く、一番早く日本では京都大学の教員が、保育を学内でやろうということで、無認可の保育園を開いた時に私も一緒におりまして、そこで運営する時にある程度の教育歴の高い人たちの集まりではありましたが、初めて子どもを母親の手のない家庭外保育をする場合に、自分の子どもたちにおける言語学的な、あるいは身体発達における影響がどんなふうに出てくるのかということが全く手掛かりがなかった時代でしたので、皆手探りでやっていました。何十年経ってもその結果が出てきていなかった時でしたので、今日のアメリカにおける取り組みに関しては、非常に関心が深く聞かせていただきました。菅原先生が、日本では中々取り組みが進んでいないということだったので、それは非常に大事なことで、女性が働き続ける中で一番関心が深いところであります。

フリードマン先生にお尋ねしたかったのは、私がずいぶん前に家庭外保育に踏み切る時、経済面から言ってやむを得ない状況はもちろんですが、当時まだ、女性労働率が比較的低い時代でもありますので、母親が家にいるのに、家庭外保育をする。家庭外で公的な保育を施す意味が比較的日本の場合には難しかったと思います。つまり、母親が働かなくても過ごせるのに、なぜ公的保育に委ねるのかという問題です。アメリカはもちろんマルチカルチャーですから、いろいろな背景があると思いますが、そういう時のバックグラウンドとの関係をお聞かせ願えたらと思います。それからもう一点、保育現場の写真を見せていただいた時、家庭外保育の先生たちは女性が多いのですが、例えばアメリカの現状はどうでしょうか。日本では男性保育者が増えてきたりしています。女性保育者だけの場合との違いもその保育の質はどのように関わっているのでしょうか。

フリードマン：その時代に保育についての情報もなく、また働く母親も少なかった時代に保育所に預けるというのは非常に勇気があることだったと思っています。何世代もの家族が一緒に住んでいて、一緒に子どもの面倒をみるというようなことは、今のアメリカでは、めったに見られません。統計的にはよ

くわかりませんが、アメリカでは特に核家族化が進んでいて、核家族で子どもの面倒をみるということが非常に多いので、何世代にもわたってみているということはあまりありません。ですから、その分質の高い保育、家庭外保育が重要になってくるということです。それから、資料の写真は、特に選んだわけではありませんが、確かに男性の保育士、幼稚園の先生は、アメリカでは非常に少ないと思います。ジェンダーのことで言いますと、父親が家にいて子どもの面倒をみるのが、最近非常に多くなっています。昼間、母親が働いて、父親が夜働く、ナイトシフトで働いている場合、家でコンピュータを用いてインターネットを通じて働いたりすることができるということで、家で働ける父親が増えてきている家庭も多くなっています。NICHDの研究では、13%の父親が子どもの面倒をみているという数字が出ています。

一色：では、他の方でコメント、ご質問ございますか。

一般 B：甲南保育園で保育士をしている者です。長時間保育が子どもに及ぼす影響があるということで、保育園の中で、まだ0歳の子どもでも朝の7、8時から夜の7時まで保育を受けている子どもが多く、そのような子どもは、お母さんの仕事が長時間であるという理由で保育園にいるのですが、その子どもに対してのケアの仕方、また、家庭に対してのケアの仕方、また先程お話で、子どもの反応や欲求に敏感に反応することを伺いましたが、他にも、このようなことを保育士がしたり、家庭でお願いする大切なことがあれば、教えていただきたいのです。

フリードマン：まず、長時間保育を受けている子どものお母さんに言っていただきたいことは、長時間働いて、家でもいろいろな家事があり大変で、子どもは保育園で保育を受けているからそれで十分だというのではなくて、家でもっと話かけて欲しいということです。他のことをしている間でもいいので、話すこと、そして触れ合ってあげて欲しいということです。それから、保育園の中で長時間保育を受けているからと言ってネガティブな悪い影響があることは、とても小さいです。子どもは長時間保育を受けることで、とてもいらいらしたりして、怒りを表に出したり、お友達を噛んだりするなどいろいろあると思います。アメリカではそれに対して、子どもの感情をコントロールしたり、やっては駄目だとあまり教えていません。そこに強調を置くより、もっと本を読んであげたり、言ったことを理解できるかどうかということに重点を置いていて、あまり子どもに社会的に人との触れ合いを教えるということに重点を置いていません。

一色：では、他にいらっしゃいますでしょうか。

一般 C：本日は貴重なお話をありがとうございました。私は、少年刑務所で教官をしています。その前は、少年院で教官をしておりました。今日は、菅原先生のご著書を読んで、興味があり伺いました。少年院に勤めていて、非行のある子ども、少年たちに教育をするのは、とても大事であるし、可能性

が全くないわけではないのですが、その前の段階、小学校、幼稚園で既に芽は出ているのです。それが悪い方に発達して、非行の形に出て、それがおさまらずに刑務所に来るのだというのを私自身感じていまして、それではどうすれば小学校、幼稚園の段階で、芽を摘めばいいのかということに興味があり、そういう意味では、興味の対象は違うとは思っています。特にアメリカと日本では文化が違いますので、私はアメリカの方法がそのまま日本に当てはまるとは思っていません。日本においては、非行や逸脱を防止する観点でどういう保育を目指せばいいのか、どういう見解をお持ちなのか教えていただきたいのです。もう一つ、私の家は田舎で、幼稚園に子どもを通わせたのですが、あまりにも人数が少なく、異年齢保育ということで、4歳児5歳児のクラスとその前のクラスと一緒に保育するという形の保育園になりました。年少に入った時にそうなり、20人の内17人が年長で3人が年少でした。それで一年過ごして、年少児の発達がいいということで、子どもが上の学年に上がった時に、下の学年の子どもたちがたくさん入園してきました。25人の内、上の学年が7・8名で、下の学年が十数名のクラスになりました。それで保育を終えて2年間経過しました。市の教育委員会の方は、異年齢保育は効果が出ていい、違う年齢の子どもと触れ合うことで、上の学年の子どもは、下の学年の子どもたちの面倒をみて、優しさを磨けたし、下の子どもたちは、上の子どもたちを目標にとっても発達したという結論だったのですが、保育園の先生自身は、これは失敗だったと仰っていました。何が失敗なのかよくわかりませんが、上の学年の子どもが下の学年の面倒をみることはないというお話でした。上の学年の子どもはもっと成長しなければいけなかったけれども成長できなかったという評価をされていました。これもどう考えればいいのでしょうか。私自身の評価としては、下の学年にいる時は、上の学年の子どもたちをみていたので、競争心を持って、できなかったことができるようになった気がしますが、確かに上の学年になった時に、下の学年にいた時のような成長がみられなかったような気がしています。

一色：ありがとうございます。では、フリードマン先生からコメントをいただいてから、菅原先生からコメントをいただくという形にしたいと思います。

フリードマン：まず非行をする子どもたちの問題ですが、アメリカでは、小さい時から教育した方がいいという考えがあります。特に介入と言いついて、特に所得の低い家庭の子どもがネグレクトされていたり、親の注意を得られないことが多いので、そこに介入をして社会全体で育てていこうという考え方があります。それはお金がかかるのですが、早く介入していた方が、後での問題に比べるとそちらの投資の方がいいのではないかとされています。それから異年齢の保育については、アメリカでも小さな町では、異年齢保育が行われていることはありますが、それが悪いということはあまり聞いていません。それは専門領域でもないもので、よくわかりませんが、先生にとっても、年齢に適切な教材とか教え方がありますので、ある一つの年齢に集中して保育した方がいいというのはあるでしょう。

菅原：前半のご質問については、フリードマン先生と同じです。これから先の日本のやり方としては、発達最早期での、妊娠中から、家族がスタートするところからの継続したサポートが必要だということ

です。殆どの家庭は自分たちで養育していくことができますが、やはり、どんどん困難が重複してリスクが重なっていく家庭があると、それは継続して家族に介入していくことが必要になります。将来非行につながるような子ども自身の持つ情動調整の弱さの問題がある場合にこそ、包括的な家族介入を継続して行えるシステムを作っていくことが重要であると思います。思春期以降に少年院に来て、そこから初めて介入が始まるとすれば、その介入は非常に困難であることが様々な研究でも知られていることなので、できるだけ早期の介入が実現するようにシステムを変えて行くことが必要です。もう少し、日本でもこうした子どもたちの困難をきちんと科学的に見つめていくことが大事で、とにかく、精神論で本人が立ち直ることが大切、というのは少し短絡的だと思います。どうして少年院に来るような展開になってしまったのか、ストーリーを読み解いていく。なぜこのようなストーリーになって来たかというのは、先程の新しい家族がスタートするところから読み解いていって、そこに重複したリスクがたくさんあるはずなので、それを動かせるところから動かしていく辛抱強さが必要だと思います。私たち日本人は少し短気で、先生やお母さんががんばればなんとかなる、本人の根性が治れば良くなる、という考えが強いと思いますが、子どもに影響する養育環境の効果は非常に大きいということを、フリードマン先生の研究から私たちも学び、もう少しきちんと包括的な粘り強い観点を持つていく必要があると思っています。

一色：ではこの辺りで終わりにしたいと思います。今日のフリードマン先生と菅原先生からのお話で、私が感じたキーワードは、やはり、エビデンスベースできちんと科学的な研究に基づくことがとても大切だということです。そして現場では、現場でのいろいろな経験があります。その両方をいかにうまく結びつけるか。やはりそのためには、保育所の保育士の専門性を高める。このことが保育の質をという話が中心的なテーマでした。それから最後に保育士と家庭、親との連携をいかにうまくとっていけるかこの辺りがお二人の先生のお話から、私が感じた点です。今日はどうもありがとうございました。